

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
00-008	北東部インド山岳地帯・カンシー社会の動態と持続性についての歴史人類学的研究		
	インド	North Eastern Hill University	
	三瀬利之	東京大学大学院	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

本研究が対象とするインド北東部・旧アッサム山岳地帯のカーシー丘陵は、遠く北にチベット、西にヒンドゥー、南にイスラーム、東にビルマといった平地の周辺諸文明との長い接触の歴史と、イギリスやインド連邦下での部族統治にも関わらず、今なお、母系制 (matrilineal System) を中心とする独自の社会システムが、近代的なマクロシステムと併存しながら維持されている。

母系制だけでなく巨石文化、ドロイ (Doloi) と呼ばれる伝統的政治体制、モン＝クメール語系の言語が存在するカーシー族社会は、言語学的・考古学的・民族学的ユニークさから、植民地時代より早くから集中的に調査がなされた地域であった。しかしそのアプローチには多くの植民地主義的バイアスが含まれていた。すなわちインドを<カースト>に規定された社会として捉え、<トライブ>をその<カースト・システム>の周縁に位置付けるという認識である。こうした認識論からは、文明の狭間にあつて歴史的に重要な役割を果たしてきたトライブ社会の動態と自立性は浮かび上がってこない。現代人類学の立場からは、こうした過去の民族誌の読み直しと厚みのある一次データの収集が求められる

以前は政治的・軍事的制約から、1950年代の中根千代の調査 (cf. [Garo and Kashi 1967](#)) 以降、専門的人类学者による同地の本格的調査を実施することができなかった。しかし近年、外国人による現地調査が正式に開放されるようになった。本研究では、インドのトライブ研究の中心地の一つ、North Eastern Hill 大学(在メガラヤ州シロン)人類学部においてトライブ調査にふさわしい調査方法の指導を受けながら、フィールドワークや史的調査・統計調査によって、カーシー族社会の実態をよりリアリティーに近い形で複眼的に捉えるデータを提示する。そしてこれらのデータを総合的に分析することを通じて、従来のトライブ社会像の見直しと、<周辺社会>の現在を捉えなおす新たな人類学的視座を提示したい。

既に申請者は、1999年1月より、インド連邦メガラヤ州ワール地方の村落部において言語・慣習調査を開始している。これまで明らかになったことは、父系社会との長い接触の歴史にもかかわらず、母系制は、婚姻規正・財産相続・政治的役職の継承など、今日のカーシーの社会原理として充分機能していると解釈しうるものであることである。本研究では、母系制の持続と変化を中心に、カーシー社会の動態と持続性を歴史学的・人類学的に把握したい。

最終成果報告書 2004年4月19日

概況

今日、「近代化」「グローバル化」の波は世界の隅々まで及び、これまで比較的自給自足的な生活を営んできた「伝統社会」の人々にも、多大な影響を与えている。しかしながら、こうした「伝統社会」は、近代化やグローバル化によって必ずしもその独自性と自立性を失う訳ではない。それらは新たな状況のなかで変化を遂げ、適応し、再編成されるものでもある。本研究の目的は、この現代世界の「伝統社会」に働くさまざまな力学を明らかにし、その持続と変容のメカニズムを明らかにすることであった。こうした作業を通じて、われわれが現在、いかなる世界に生きているのかを問い直してみることもできるであろう。

本報告書の調査地は、インド連邦共和国の北東部にある山岳丘陵地帯である。ここは南アジアにおける「文明の坩堝」ともいふべき地域で、遠くは北にチベット、西にヒンドゥー、南にイスラム、東にビルマといった平地の諸文明の狭間に位置し、インド・アーリヤ語系、シナ・チベット語系、タイ・ビルマ語系、モン・クメール語系の少数民族が多く居住する地域である。現地調査は、このインド連邦・北東部地域を構成する7州の1つ、メガラヤ州で行われた。ここは南のベンガル平原、北のブラフマプトラ川流域アッサム平野に囲まれた「陸の孤島」ともいふべき丘陵地帯で、その名の由来「雲の棲家」が語るよう、世界最高降雨量を誇る地域である。6月から9月までの雨季の降雨は凄まじい。この雨量と森林・洞窟・丘陵などの組みあわせで生じた特殊な生態系のため、インドでも数多くの珍奇な植物種や動物種が生息している。近年は石炭の乱掘が進み、森林破壊、酸性雨、土壌流出などの環境問題でも知られている地域である。

しかし人類学的にその名を知らしめているのは、そこに居住する「カーシー (Kashi) の「母系制」と「巨石文化」である。とりわけ「母系制」は、イギリス植民地統治以来の部族政策とキリスト教の浸透にも関わらず、今なお、近代的なマクロシステムと併存しながら維持されており、「伝統社会」の持続と変容を調査する上で格好の対象となっている。

現地調査においては、メガラヤ州シロンにある「インド社会科学調査評議会」(India Council of Social Science Research)の北東地域支部の客員研究員として、のべ2年間にわたるフィールドワークと文献調査を行った。本報告書は、その成果の報告である。

調査に際しては、初年度の半年は、シロンにあるインド北東丘陵大学のネイティブ人類学者・社会学者の指導を受けながら、現地語「標準カーシー語」を学習した。その後、シロン、ジャンティア丘陵の中心地ジョワイ、ジャインティア丘陵ワール地方のノンタラン村でフィールドワークを行った。また短期で、バングラデッシュ北部に

あるかつての冬の王都ジャインティアプールに居住するカーシー人の言語調査も行った。

文献調査については、ニュー・デリー、カルカッタ、アッサム州グアハティ、メガラヤ州シロン、ロンドンの公文書館で、植民地時代の部族政策に関する公文書を収集した。独立後の資料については、メガラヤ州議会図書館の文書館、北東丘陵大学の付属図書館、ネルー記念博物館図書館を利用した。また初期のキリスト教布教と標準カーシー語の作成過程については、西ベンガル州にあるバプティスト系のセランプル大学付属ウィリアム・キャレイ図書館、およびウェールズ国立図書館にあるメソヂスト系教会の関連文書を参照した。

現地調査に際しては、とりわけシロン市ではL.M. 女史、ジャインティア丘陵の調査ではH.M. 氏のお世話になった。滞り場所だけでなく、さまざまな情報や関係者を紹介して頂いた。彼ら・彼女らの援助なくしては、調査が円滑に進まなただけでなく、カーシーの人々についての理解がもっと平板で単純なものとなっていたと思われる。

またインド北東丘陵大学、インド社会科学調査評議会以外にも、多くの団体や組織のお世話になった。当地の初等教育・成人教育の実態については、州政府初等大衆教育局、州資源センター、識字伝道団、またマスメディアや新聞については、ジーボンロイ博物館、さらに文化復興運動については、カーシー作家協会、ジャインティア文化遺産復興協会などである。ここでは関係者とのインタビューを快諾して頂いただけでなく、貴重な資料を提供して頂いた。ここに謝意を記しておきたい。

当地での生活状況について触れておくと、まず食事について。カーシーの伝統料理は、インド料理と異なり、香辛料をほとんど使用しない。米が主食で、豚や鶏肉を煮たり焼いたりし、塩などの簡単な調味料で味付けするのが一般的である。このためインド料理より馴染みやすかった。嗜好品としては、キンマの実(kwai)が広く使用されている。体が温まるので冬が寒いこの地方では必需品である。ただし石灰をつけすぎると動悸や発汗をひきおこし、歯が赤くなり歯石もできる。しかし客を歓待するさいに必ず提供されるので、受け取らざるをえないのが大きな問題であった。また雨季の雨は予想以上にすさまじく、悪天候の山間部では、文字通り、雲の中に入ってしまう。洗濯物はまったく乾かず、湿度が極端に高いので、乾燥したものも湿気を吸収し、放置すると黴が生えてくる。雨とこの洗濯物の問題が、一番頭を悩ませたことであった。

都市部に滞在中は、大学の寄宿舎に滞在して文献調査をしたり大学の専門家と意見交換をしたりして過ごすことが多く、フィールドワークでは現地の知人宅を拠点に調査を行った。村落部での調査の問題は、電気であった。活動時間が極端に限定されるからである。水汲みや洗濯などは日課になったものの、お湯をわかして水浴びというのは、特に厳冬期にはとてもきつい。もっとも彼ら・彼女らと同じ生活をして見えてくることは多く、この点でも意義深いことであった。

調査内容

以上のような状況で、母系制を中心とするこの伝統的な社会システムの持続と適応のメカニズムを明らかにすることを目的とした調査を行った。

さまざまな政治的・経済的環境が変化した今日のカーシー社会でも、母系制の特徴すなわち母方の苗字の継承、末娘の財産相続、妻方居住などの現象が観察されている。1950年代に当地を調査した社会人類学者の中根千枝は、「母系制は、母権的ではなく実態として父権的である」とのべたが、実際、今日でも、女性の政治への不参加、子供や老人の扶養義務の押し付けなどは、とりわけ村落部では顕著に観察される。しかし他方で、伝統的にみられた「母方オジ」の権威は低下、都市部では相続での平等配分、夫方居住などの現象も見出され、母系制は変化にさらされているという点も指摘できる。

これまでの研究では、母系制の登場とその衰退は、大雑把に二つの立場から説明されてきた。一つが、バツハオーフェンからマクレナンにいたる社会進化論の考え方である。すなわち、人類の婚姻形態は、原始乱婚から母系制に移行し、父系制に移行するという発展三段階説である。ここでは、「乱婚状態」では父系で出自を辿ることが不可能なため、必然的に母系制になったと想定されている。事実の裏づけがない進化論的な考えは、今日ではほとんど支持されないが、ある種の乱交状態が今日のカーシー社会でも見受けられるのも事実であり、それは未成年出産や未婚の母、エイズ流行などの社会問題の形で現れている。婚姻、性交渉、避妊などの問題は、母系制を論ずるうえで重要ではあるが、プライバシー等の問題で立ち入ったことは調査することはできない。相続の焦点となる末娘 (khadu) が明らかにベンガル人の顔をしていても、それを質問することはできなかった。

もう一つの立場は、「機能主義」的に説明する現代人類学の立場で、母系制を支えてきた様々な生業システムや価値観の変化から説明するものである。カーシー社会の母系制の変化については、とりわけキリスト教の布教と学校教育の役割が強調されてきた。とりわけキリスト教的な一夫一婦制の観念の普及は重要な要因であろうが、伝統宗教 (Niamtre) の信奉者だけでなく、人口の約半数を占めるキリスト教徒の間でも、母系制は根強く残っており、必ずしも決定要因ではない。

本調査では、従来あまり強調されなかった他の要因も考慮してみた。それが生活技術の変化に伴う社会関係の変化についてである。これは、例えば社会学者の上野千鶴子が、戦後日本の家族形態の変化を生活技術の変化から論じた研究を念頭においている。彼女は、高度成長期の日本にあって、洗濯機や掃除機などの家電製品の普及が女性を家事労働から解放し、女性の社会進出とそれに伴う労働力の提供を可能にし、それが高度成長期の労働市場に適合的な家族構造を生み出したと論じた。本研究で検討したいのは、こうした近代的な家電製品の普及が、母系制を中心とする伝統的な社会

システムにどのような影響を与えたかである。技術環境の異なる都市部と村落部での比較研究を視野に入れ、シロン市とノンタラン村でのフィールドワークを行った。女性は、その一日の時間の多くを家事労働に費やす。水汲み、洗濯、炊事、育児、等々。村落部ではこの形態はおおむね変化していないが、都市部では家電製品の普及が観察されている。これらは明らかに、彼女たちの生活スタイルを大きく変えている。これらの変化と具体的な親族関係や社会システムの変化との関係については今後も継続調査していきたい課題の一つである。

「母系制」を調査する過程で気づかされたことは、人々の語りと実際の実践のズレである。実践としては、母系制的な慣行は弱体化していると見受けられるが、語りのレベルでは頻りに語られることである。これは、ポストモダン派の論者がいうように、人類学者などの「外国人」の眼差しを意識したから、というより、むしろ地域交流の活性化の結果、特に様々な民族的バックグラウンドをもつ子女が集まる高等教育や職場の現場で自覚される場合が多いようで、そのような語りを調査中に何度も聞く機会があった。「外国人の視線」というのは、まだ彼ら・彼女らにとっては意識するのに遠すぎる対象であるというのが印象である。これらの語りは、おおむね「女性に対して敬意をもった社会、権利を与える社会」という、肯定的な判断と文化的な誇りと結びつくのが普通であるが、他方で、社会改革的な視点から母系制から父系制への移行を主張する論者や団体もあった。母系制が、経済発展に不可欠な男子への教育投資を妨げるとか、男子に家族の扶養義務を与えてないというのがその理由である。人々の日常的な実践から距離をおいたところで、母系制についての議論が当事者によってなされている、そうした現象が観察されている。

また本調査では、母系制以外にも、さまざまな伝統的慣習についての調査を行った。その一つが「言語」である。言語は通常、自然発生的で、その地域に特徴的なものを体現していると捉えられる。文化運動やナショナリズムが「言語」と結びつくのは自然の成り行きなのである。しかし少数民族の少数言語の場合、その歴史を辿ってみると、異なる様相が見えてきた。

カーシー社会はイギリスの植民地統治下より多言語状況におかれている。そこではカーシー語はマイノリティー言語である。そしてこのカーシー語を標準化し、その文字表記法を作成したのが、外部の宣教師であった。本調査ではとりわけ宣教師による標準語の作成の過程を調べた。なぜなら、それ以前のカーシー語は方言差が大きく、現在のカーシー社会全体の地理的範囲で流通する共通語は存在せず、この意味でこの作業は重要な意味を持つだろうからだ。

この結果、興味深いことが明らかになった。まず表記法については、カーシー語を言語学的観点から忠実に文字化したというより、むしろマジョリティー側、すなわちウェールズ系宣教師たちの都合にあわせて作られていたという点である。それが今日のカーシー語表記に残るウェールズ語表記法の痕跡である。同様のことは文法の標準

化のプロセスにも見られた。植民地時代、教育活動は教会が一任されていたという特殊な条件下で、聖書の典礼言語が世俗言語としても流通していた。そこで重要な意味を持っていたのが翻訳聖書である。しかしこの聖書の言語は、当時のカーシー語の言語慣行を必ずしも忠実に反映していた訳ではなかった。つまり神学論争上重要な記号となる文法項目については、当時のカーシー語には存在しなくても、古典ギリシア語文法に準拠しながら構築され、それ以外の部分は基本的に簡素化されるという側面があった。植民地主義というのが、国家による限定的同化と差異化の宙吊り状態であるとすれば（例えば、国民としての義務を完全に負わせながら、権利は限定的にしか与えない）、こうした限定的な同化と差異化は、言語の標準化や表記法にまでも貫徹していたといえる。

また本調査では、母系制や現地語などの「伝統」を意識的に維持しようという運動、いわば「文化運動」とも呼べるものも調査した。具体的には、「カーシー文化」だけでなく、これまで「カーシー文化」の一地方、「カーシー語」の一方言として位置づけられてきたジャインティア丘陵地帯のジャインティア（自称プナル）を調査した。このジャンティアはカーシー社会のなかでも人口規模が大きく、前植民地期にはヒンドゥー王権を持つ特異な歴史を持っており、歴史学的にも人類学的にも興味深い対象だからである。具体的には、ジャインティア丘陵の中心地ジョワイを中心に、文化運動の関係者にインタビューや文献調査をおこなった。その結果、以下のようなことが明らかになった。

目下のところ、文化運動は一枚岩的な運動ではなく、幾つかの異なる利害関係を持つ主体に分類できることが明らかになった。教会系、知識人系、学生運動系である。教会系としては、ジャインティア丘陵では、Faith Christian ChurchとChurch of Godがその代表で、福音主義的な色彩が色濃い。彼らがジャインティア語と文化を強調するのは、周辺の僻村ではまだまだ標準カーシー語を解さない村が多く、この地方の共通語となっているジャインティア語を、布教の媒体として使うためである。ジャインティア語による布教は、カーシー語での布教を行う他の無数の宣教団との競争に勝ち抜くための、一つのリソースとなっている。このような宗教系の組織がまず一つ。

次の知識人系の運動母体には、カーシー作家協会、ジャインティア文学協会とジャインティア文化遺産復興協会が大きい。特に後二者は、ジャンティア丘陵の人々の政治的権利拡大の認知のため、1970年代より、ジャインティア文字の創出などを手がけてきた。活動が、一部の知的サークルに運動にとどまる傾向があり、特に文化遺産復興協会は、その構成員が若手の中等教育機関のメンバーが中心になっていることが特徴である。

最後に大きいのが、学生運動系である。学生団体は、州政治を左右するほどの圧力団体となっているが、ジャインティア文化の認知運動には、インド独特の制度である「留保制度」の問題があると思われる。留保制度とは、インド共和国のなかで、自由

競争が下層階層に不利との認識から、彼ら・彼女らに、官職、議席、就学において一定の枠を設けるという制度である。実際、現在のメガラヤ州では西半分を占めるガロ族と中央を占めるカーシー族への留保枠を認めているが、東半分を占めるジャインティア族に対しては、カーシー族の枠内に入れられ、独立の枠が設けられていない。ジャインティアの言語と文化の復興運動は、この留保制度との関係が重要となっていると考えられる。

しかし調査している過程で明らかになった興味深いことは、運動に関与している個人や組織は実は狭い血縁・地縁関係者が多いこと、と同時ににもかかわらずそれらがそれほど相互に連動していないという事実であった。私がどこそこの誰それはこういう活動をしている云々と述べると、「それは私の義理の父だ」とか「それは私の伯父だ。彼はそんなことをしていたのか？」というような発言によく出くわした。実際、中高等教育機関の教師・研究者には幾つかの親族関係者が多い。そして血縁だけでなく地縁や宗教などを基盤としたこうしたネットワークが幾つか断片的に存在している。要するに、現状は、それらがそれぞれの思惑で活動をし、それが間接的に連動しながら、遠目には大雑把に「伝統の復興や保持」と映るのではと思われる。

しかしながら他方で、こうしたネットワーク群から漏れている多くの民衆がいるのも事実である。ジャインティア出身のユニテリアン（キリスト教の影響を受けた土着宗教）神父で『Kyntu（目覚めよ）』の新聞編集長は、そうした活動をあまり知らないし、新聞をジャインティア語で発刊する可能性はほとんどないという。誰も関心を持たないからという。断片的なネットワーク群と一般民衆との分離が、この萌芽的なナショナリズム運動・文化復興運動の特徴となっているといえる。

総じて見て、「伝統社会」の変化に限らず、ある社会の変化を近似的にでもシュミレーションできるようなモデルを考えようとするとき、「伝統」対「近代」あるいは「保守」対「革新」といった図式はあまりにも単純すぎる。むしろいったん「伝統」や「近代」といった枠組みを保留し、彼らの社会生活で重要な位置を占めるさまざまな組織や個人に注目し、その個人や組織の戦略や思想、そのネットワーク等を探るアプローチが有効であると思われる。「母系制」は、確かにその前植民地期には、生態学的に環境に適応したシステムであったかもしれない。しかし今日、「伝統」というのは、断片的な知識のネットワークの集積物であり、それらが様々な主体によって適宜リソースとして利用される、そうした状況にあるのだということである。今日、カーシー社会をめぐる環境は大きく変化している。しかし母系制を中心とする伝統的社会制度が、どの程度、持続し変容するのかは、この伝統的システムが、こうした新たな社会環境にどのように対応するのかにかかっているだろう。